提訴に至った思い

西　スミ子

私は、施設で足の手術を繰り返され、自分のことも自分で出来なくなる重度障害者にされてしまいました。１３歳のころになると、生理が始まり看護師や保母から「自分の生理の始末も嫌なのに人のは尚更嫌だ」などと言われ続け、私は精神的に追い詰められました。そんな中で、「また生理なの?」「生理が無くなる手術があるよ」と言われ、生理がなくなる手術を受けた方がいいように思うようになりました。

親が優生手術をすることを承諾してしまい、優生手術を受けさせられてしまいました。

当時、その手術の意味を知っていたら絶対に受けていなかったです。

それからかなり時間がたった後、結婚をしたいと思う人に出会い、子どもが欲しくて、手術を受けた病院に行き、どのような手術をされたのか説明を求めました。長い時間待たされた後に図を書いた紙を医師が持って来て、色々話されました。説明された内容はよく解らず、解ったことは子どもが出来ない体になっていたということでした。

子どもが欲しくて乳児院を訪ねましたが、生活保護のため子どもを引き取ることは出来ませんでした。

子どもを産めていたらこのような思いはせずに済んだはずです。

このような障害者にとって残酷な法律を作った国に、きちんと責任を取って欲しいです。

私と同じような思いをした犠牲者の方々に対して、国は真摯に対応して欲しい、これが私の願いです。

以上